



## グアダルキビル川流域の都市誌

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2011-09-02 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 山崎, 俊郎 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://doi.org/10.24729/00010065">https://doi.org/10.24729/00010065</a>

# グアダルキビル川流域の都市誌

山崎 俊 郎

## 一、はじめに

ヨーロッパ大陸の西端に位置するイベリア半島は、最狭小部一五軒ほどのジブラルタル海峡を挟んで北アフリカのモロッコと対し、地中海の西を扼する地理的位置にある。ピレネーの天嶮に隔てられているとはいえ、六〇万平方軒に及ぶこの巨大な半島が、他の西欧諸国とかなり異った歴史を歩んで来たことは周知の事実であり、積み重ねられ、混合された文化の足跡を今もなお至るところに見出すことができる。

暗黒時代といわれたヨーロッパの中世に於て、イベリアは最も輝やかしい文化の華を開かせた地域であり、ことに八世紀から十世紀末にいたるアンダルシアはその中心であった。西ゴート王国の首都トレドに代って、グアダルキビル川中流に位置するコルドバが栄え、セビリアや、シエラネバダ山脈北麓の水に恵まれたグラナダが空前の賑わいをみせる。これらの都市はいずれも、フェニキアの植民やローマ時代に遡る古い歴史をもつカジス、マラガ、アルメリアなど南部海岸諸都市とともに、現在に至るまでアンダルシアを構成する各県の中心都市となっている。

グアダルキビル川は全長約五六〇軒、流域面積約五七〇〇平方軒<sup>①</sup>。シエラモレーナ山脈の東南部に源を發し、西流してコルドバからセビリアに至り、南下してサンルカール・デ・バラメダから大西洋に注ぐ。また、ピレネーに劣らない高峻なシエラネバダ山脈は地中海岸に迫るが、その北麓には回教徒最後の首都グラナダがあり、ヘニール川はこれより西北流して、パルマ・デル・リオでグアダルキビル本流と合する。

ムーア人のイベリア侵入と深い関わりを持つこれら流域は、また最もスペインらしい地域的特色を留めているところでも

ある。アンダルシア地方の八県のうち、地中海に面したアルメリア、グラナダ、マラガ各県の一部を除いて、ウエルバ、カジス、セビリア、コルドバ、ハエンの各県は、この川の本文流沿いに多くの集落を發達させ、景観の上からもフランスに近いピレネー山麓のバスク、ナバラ、カタルーニヤ地方などとは異なる趣をみせている。

この稿に関連して巡検した集落は、ラ・マンチャ地方のマンサナレスに始まり、アンダルシアに入ってハエン Jaén 県のアンドハル Andujar、コルツバ Córdoba 県のモントロ Montoro、コルドバ Córdoba、バルマ・デル・リオ Palma del Río、セゴリア県セゴリア Sevilla、カジス県カジス Cádiz、サンルカール・デ・ブラメダ Sanlúcar de Barrameda、ウエルバ県ウエルバ Huelva、アヤモンテ Ayamonte 等である。

西欧諸国に較べ、一般に都市化の遅れているスペインは、島嶼地域を含め全土で五〇県からなるが、人口一〇万人以上の都市三七（うち県庁所在地二七）、五〇万人以上になると、首府のマドリード（三一五万）をはじめ、バルセロナ（一七五万）、バレンシア（六五万）、セビリア（五五万）の四市を数えるにすぎない。都市化の進捗が遅いということは、一面、都市の歴史的發展過程を考察する場合、再開發等による過去の歴史的景観の破壊が少ない故に便宜が多い利点がある。本報告に関連する都市は前記のうち、主としてグアダルキビル川沿いの六市で、現地役場で得た平面図をもとに若干の解説をつけ加えたい。ことに、歴史的都市として知られるコルドバ、セビリアでは、進められつつある都市計画についてふれる。

## 二、グアダルキビル川流域の地域的特色

グアダルキビル川の語源となったムーア人の Wadi al Kibir は「大きな川」を意味する。北部のキリスト教徒の勢力が拡大し、いわゆるレコンキスタが完了するのは一五世紀末であるが、イベリア北部に較べ、年間を通じて明るい太陽と、乾燥地域にしては比較的水に恵まれたアンダルシア地方は、永らく回教徒達にとって統治に値する沃野であった。

### 1、アンダルシア地方の自然

「ヨーロッパはピレネーに始まる」とか「ヨーロッパのアフリカ」等の表現は、イベリアの住民にとって好ましい言葉ではあるまい。しかし、緑の多い季節ですら航空機で西欧からピレネーを越えると、広大な赤茶けた大地の拡がりに驚かされ

第1表 地方別高度分布\*

地 方	200m 以下	201~ 600m	601~ 1,000m	1,001~ 2,000m	2,000m 以 上	計(**) (km <sup>2</sup> )
ア ン ダ ル シ ア	23,707	31,826	19,717	11,385	632	87,268
ア ラ ゴ ン	1,525	18,138	13,133	13,919	935	47,669
ア ス ト リ ア ス	2,070	3,373	2,650	2,447	25	10,565
カ ス チ ー リ ャ ・ ラ ・ ヌ エ バ	—	10,077	46,804	15,148	334	72,363
カ ス チ ー リ ャ ・ ラ ・ ビ エ ハ	1,365	4,186	37,589	22,835	131	66,107
カ タ ル ー ニ ャ	6,435	9,593	10,614	3,118	2,169	31,930
エ ス ト レ マ ド ー ラ	1,111	36,143	3,643	705	—	41,602
ガ リ シ ア	4,981	15,206	7,261	1,985	—	29,434
レ オ ン	20	722	28,273	9,289	58	38,363
ム ル シ ア	1,692	6,022	14,731	3,729	—	26,175
バ レ ン シ ア	6,101	8,121	7,527	1,556	—	23,305
バ ス ク ・ ナ バ ラ	1,625	9,509	5,511	1,037	—	17,682
バ レ ア レ ス	4,247	630	87	50	—	5,014
カ ナ リ ア ス	2,531	2,480	755	1,262	245	7,273
計	57,410	156,026	198,295	88,445	4,547	504,750

\* Emilio Alija Rivarés : Geografía de España により山崎補訂

\*\* ESPAÑA Anuario Estadístico 1977 による

る。この景観の変化は内陸に入るほど顕著であり、中央部の首都マドリードは砂漠の中に都市が開けるといった感じである。加えて全土が高原状のイベリア半島は、一層その自然を厳しいものにしていく。

第一表はスペインの地方別高度分布を示すが、④国土の二七・四%を占める新旧カスチーリヤ(ヌエバー四・三%、ビエハ一三・一%)は、約八九%が高度六〇〇米以上で、多くは土壤の未発達なメセタである。それに較べると、地方別面積一七・三%で最大のアンダルシアでは、六〇〇米以下が六三・六%となり殊に二〇〇米以下は二七・一%で、これはスペイン全土の四一・三%にも相当する。日照を好み乾燥にも強い作物を選び、若干の灌漑が伴えば農耕地たりうる。グアダルキビル川の左岸、特に支流のヘニル川流域はローマ時代から開かれ、回教徒によってグラナダが最後まで拠点として繁栄したのも豊かな農産物がその基礎となっていた。

また、⑤気温・降水量の地域的分布をみると、第二表のごとく、半島北西部からカンタ

第2表 地域別気温(°C)・降水量(mm)

都市 \ 月	1. 2. 3.	4. 5. 6.	7. 8. 9.	10. 11. 12.	年
ラ・コルーニャ	10.0 180	14.4 92	19.0 125	12.3 460	13.9 857
ビルバオ	9.2 273	14.8 212	19.6 278	11.5 374	11.5 1,137
アビラ	4.3 24	12.5 136	17.2 127	5.9 155	10.0 442
マドリード	8.3 66	16.3 149	21.3 170	8.9 212	13.7 597
バダホス	10.7 92	19.5 172	24.8 70	12.4 255	16.9 589
パンプローナ	7.4 197	14.4 166	18.1 239	8.4 194	12.1 796
バルセロナ	11.2 59	17.9 79	22.7 247	13.7 107	16.4 492
バレンシア	11.8 20	18.2 177	24.1 81	14.5 150	17.2 428
ムルシア	12.3 32	19.6 181	25.7 91	15.0 84	18.2 388
カジス	13.1 205	18.4 140	24.1 100	15.1 323	17.7 768
コルドバ	10.6 68	19.2 150	25.5 70	12.5 355	16.9 643
グラナダ	7.8 84	16.4 120	22.8 26	9.7 241	14.2 471
ハエン	10.3 148	18.7 148	25.2 32	11.6 255	16.5 583
セビリヤ	12.7 174	20.4 118	26.5 85	14.7 366	18.6 743
アルメリア	13.2 21	18.9 110	24.3 32	14.3 79	17.7 242
ウエルバ	13.3 133	19.2 74	24.7 131	14.8 310	18.0 648
マラガ	12.1 166	17.9 128	24.3 16	14.7 379	17.3 689
パルマ・デ・マジョルカ	11.1 61	18.9 83	24.8 121	14.1 227	17.4 492

ブリア海にかけての地域に年間一〇〇〇ミリ、部分的には二〇〇〇ミリに達する降水量をみるが、一般に内陸に進むに従い減少して地中海岸では極めて寡雨となる。グアダルキビル流域では河口に近いカジスで年間七六八ミリ、上流に向うに従いセビリア七四三ミリ、コルドバ六四三ミリ、ハエン五八三ミリ、グラナダ四七一ミリとなり海洋からの影響が減少する。季節的にも夏の高温時に極端に乾燥し、前記都市で三ヶ月間にそれぞれ一〇〇、八五、七〇、三二、二六ミリと、わが国のようなモンsoon地域の住民からは想像しがたい厳しさである。一九七六年度の最高温はセビリアの四二・八度であり、七五年には四四・〇度を記録し、ヨーロッパのアフリカといわれる一面をのぞかせている。

## 2、スペインにおける社会的・経済的地位

風土からみて、必ずしも農業には適さないスペインの中で、古くから農業地域としての特色を持ちながら発展してきたアンダルシアであるが、工業化の促進に努めつつある現代スペインに於ても、なおその特徴を強く留めているのがこの地域である。

第三表は、この地方を構成する八県と、工業化の進んだ主要各県の代表都市を記す。生産額では、漸く工業国とみられる地位にまで進展してきたこの国の中でも、アンダルシアは未だに第一次産業比率の高い地域である。いくつかの大都市を有しながら、マラガ、カジス、セビリア各県を除いては、人口密度からみて全国平均に及ばないし、グアダルキビルを遡るにつれ一次の比率が大きい。セビリア三一・二%、コルドバ四六・九%、ハエン五一・七%、グラナダ五一・一%となり、マラガ、カジス、セビリアで比較的割合の小さいのは、商工業的機能と観光・保養的要素のより高いためである。それでも工業化の進んだマドリッド、バルセロナ、ビスカヤ(県都ビルバオ)、ギブスコア(県都サン・セバスチアン)等の第一次比率と較べると対照が顕著である。このことは一人当りの県民所得にも現れている。即ち五〇県における所得順位では、上欄の先進県が全国の上位を占めるのに対し、アンダルシア各県はいずれも低く、経済的に遅れた地方の現実を示している。

素朴な人達の住む、古い多くの歴史的都市と、眩しく陽光に照らされた白亜の小集落は、この地域の特色ある景観であるが、底に流れる物憂いやるせなさは、この経済的貧困と決して無縁ではあるまい。

オリーブで全国屈指の生産高をあげ、またブドウ、ハタンキヨウ、オレンジ、ポンカン、レモンなどの果樹のほか麦類、

第3表 アンダルシアと主要各県の職業別人口と生産額

県	人口* (1970)	密度* 人/km <sup>2</sup>	職業別人口(%)**			生産額(%)***			*** 所得 順位
			1次	2次	3次	1次	2次	3次	
マドリード	3,792,561	474	3.9	40.1	56.0	1.6	31.3	67.1	1
バルセロナ	3,929,194	508	4.1	55.4	40.5	2.8	47.0	50.2	3
バレンシア	1,767,327	164	30.3	34.1	35.6	17.9	31.9	50.2	11
ビスカヤ	1,043,310	471	9.9	52.7	37.4	5.1	52.0	42.9	2
ギプスコア	631,003	316	10.3	55.8	33.9	8.7	51.9	39.4	4
アルメリア	375,004	43	49.9	20.0	30.1	26.1	26.6	47.2	45
グラナダ	733,375	59	51.1	18.4	30.5	26.7	20.9	52.4	41
マラガ	867,330	119	34.1	27.6	38.3	16.9	25.4	57.7	21
カジス	885,433	120	33.2	29.9	36.9	21.4	33.2	45.4	18
ハエン	661,146	49	51.7	22.1	26.1	26.5	27.7	45.8	49
コルドバ	724,116	53	46.9	22.9	30.2	29.7	25.7	44.6	32
セビリヤ	1,327,190	95	31.2	30.9	37.9	21.2	27.3	51.5	17
ウエルバ	397,683	39	38.9	28.8	32.3	24.2	32.7	43.1	28
全 国	34,032,801	67	40.7	28.9	30.4	16.1	35.3	48.6	—

\* ESPAÑA Anuario Estadística 1977

\*\* Geografía de España Ilustrada Sopena, 1974

\*\*\* Emilio Alija Rivarés : Geografía de España, 1973註⑧

トウモロコシ、豆類、トマト、玉ねぎ、野菜類などを生産する。また、牛、羊、山羊、豚、馬等の総量(合計トン数)もガリシア地方に次いでいる。しかしながら、旧態依然たる大土地所有経営の上に、成り立っているため、非土地所有の農業労働者を含めた貧農が多く、国内外への移民多出地ともなっている。⑧

ヨーロッパのアフリカといわれることを好まず、自らは西欧先進諸国の一員たらんと望みながら、急激に工業化への道を進んでいるスペインであるが、なお数々の社会的・経済的諸問題を抱えている現状である。その一つは高まりつつある分裂の気配であり、強い、地方自治権拡大への動きである。これは、イスパニア王国成立以前からの歴史的経過に起因する点も多いとはいえず、大きい社会的経済的地域格差の現実も見逃せない。バスク、ナバラ、アラゴン、カタルーニャ等、殆んど西欧諸国と変らない先進地域もあれば、移民、出稼ぎの送金で貧しい生計を維持している地域も多い。

国民教育も随分充実してきたものの、今なお文盲率も低くはない。<sup>④</sup> 少ない順に、一位バレアレス〇・一二％、九位ギブスコア〇・六一％、二位マドリード一・三三％、三位ビスカヤー・四二％、四位バルセロナ二・五七％、五位マラガ三・四九％、六位アルメリア四・八二％、七位セビリア五・三五％、八位ウエルバ五・七八％、九位グラナダ六・〇五％、十位セビリア七・九〇％、十一位ハエン九・九〇％、十二位カジス二一・六七％となっており、アンダルシア地方の八県は、いずれも下位に低迷している。

### 三、小都市及び在郷町の事例

マドリードの南、いわゆるラ・マンチャ地方、シウダード・レアル県のアルマグロについては一九七四年冬に巡検の機会があり、近世のプラサ景観で得ることが多かった。今回巡検した同県のマンサナレスとともに稿を改めて考察する。このような小都市、在郷の市場町は、都市化の遅いスペインでは殆んど近世と交らぬ景観を留めており、集落研究に甚だ好都合である。

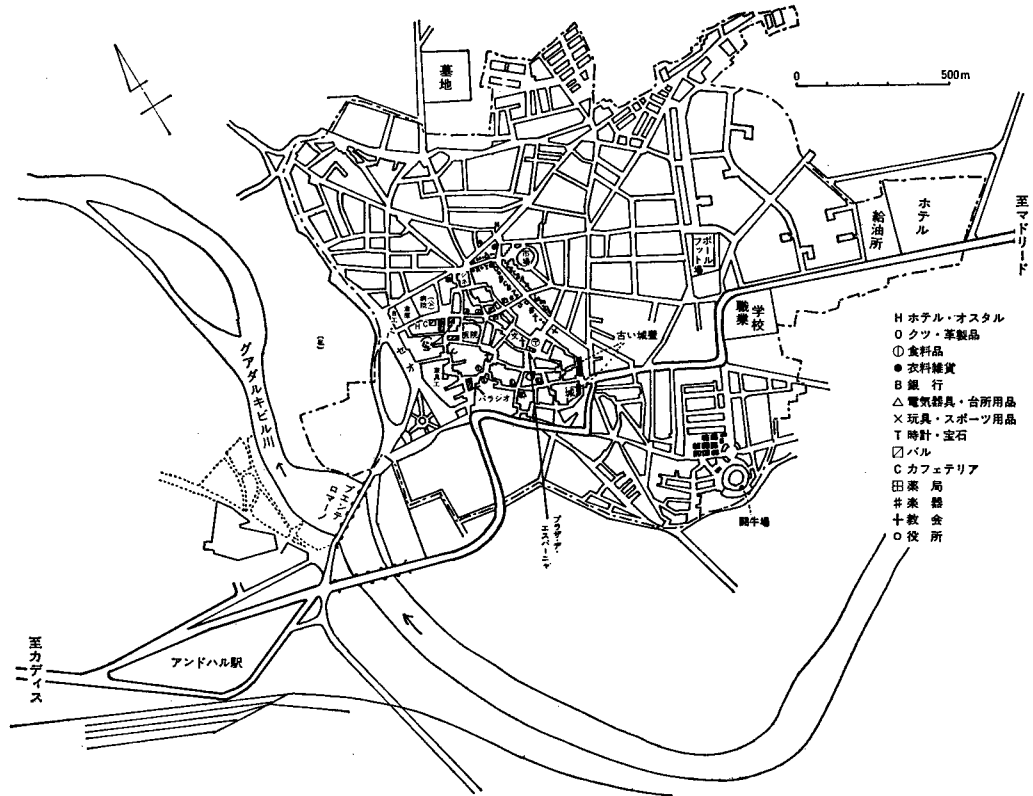
今回の場合、グアダルキビル川流域各県で郡の中心集落である Partido judicial<sup>⑤</sup> 即ち多くは県庁所在地に次ぐ、いわゆる Centro de subárea comercial の機能をもつ小都市を選んだ。

#### 1、ハエン 県・アンドハル Andújar

県庁所在地ハエン(七・八万)、リナレス Linares(五・一万)に次いで人口三・一万。他にウベダ Ubeda(三・〇万)、マルトス Martos(二・二万)、アルカラ・ラ・レアル Alcalá la Real(二・二万)等の都市がある。<sup>⑥</sup> アンドハル郡(一八〇一平方軒、一一自治体・町村、七・九万)の中心集落で海拔二二二米。<sup>⑦</sup>

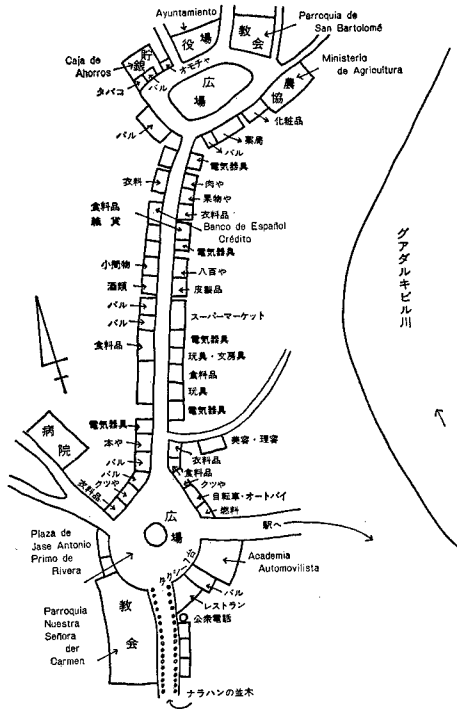
第一図は市域全図で、プラサ・デ・エスパリーニャを囲み、役場・教会・郵便局があり市街中で最も落着いた雰囲気を持つ。役場の東二〇〇米、古い城壁が一部残り、その一画はカステイリヨ(城)である。地元の人は、ロマーノの城壁と城址というが、そのままには信じ難い。しかし、ローマ、回教徒の時代に続き、アルフォンソ七世が一一五五年にこの地に入り、一二二四年、フェルナンド三世がレコンキスタを果たしているから、少なくともその時代までは容易にたどりうる。図の中央





第1図 Andújar 市街

第2図 Montoro の中心街と商店分布



部、東はメルカード（市場）、西はパセオ（散歩道）、北は倉庫・病院・シネ（映画館）、南はカジス・マドリード間の幹線道路（E二五号線）に囲まれた区域は一見して古い街並みであることがわかる。教会・学校・公私の病院・官公衙が分布し、商店は小さな食料品店とバル・カフェテリアが散在する。市場の西に現代的な店舗の各種商店が並ぶが、市場は、かつてのアーバンフリンジに位置していると考えられるから、いまの中心商店街は旧市街の外縁に新しく発達したものであろう。商店の分類は規則によらないで、記号も巡検時に記入したままを用いた。近郷の買物圏の中心としての業種・体裁を整え、現代都市的景観をみせている。市場のすぐ北にオスタルが、東の街はずれに二星のホテルがある。旧市街の外側は概ね住宅地であるが、幹線道路沿いには公営の高層住宅（八一〇階）も建設中でフットボール場周辺・職業学校付近に多い。闘牛場は、この程度の都市には、まず例外なく設けられている。

## 2、コルドバ・Córdoba 県・モントロ Montoro

ハエン県からコルドバ県に入って一〇軒のところ、曲流するガードルキビルの河岸段丘上にある。海拔一九五米で、この町（一・一万人）を核とする周辺五八一平方軒、人口一・五万（モントロを含む）の中心である。オリーブを主とした農産物の集散地で、駅より北二・五軒に集落が街村状に立地する。第二図はメインストリートの見取り図で、役場にも市街図が作成されていないため歩測と観察によってスケッチし、稚拙だが概要は理解しうると考え、敢えて記載した。街の中心広場は北の方で、役場・教会・貯銀・農協などが囲み子供たちの遊び場でも

第4表 コルドバ、セビリア間の代表的 Rio 地名

都 市 名	海 抜 (m)	勢力圏 の面積 (km <sup>2</sup> )	人 口 (人)	特 色
Almodóvar del Río	123	172.18	8,239	グアダルキビルとグアデアトの合流点
Palma del Río	54	198.89	18,757	ヘニールとの合流点
Lora del Río	38	293.09	20,914	農産物集散
Alcolea del Río	35	50.02	4,151	オリーブ、農産工業
Villaverde del Río	17	41.17	4,411	オリーブなど農産
Alcalá del Río	25	82.42	8,707	レモン、ポテト、オリーブ
Coria del Río	5	61.43	15,083	オリーブ、綿、てんさい

Gran Enciclopedia Larousse. 1977 により作成

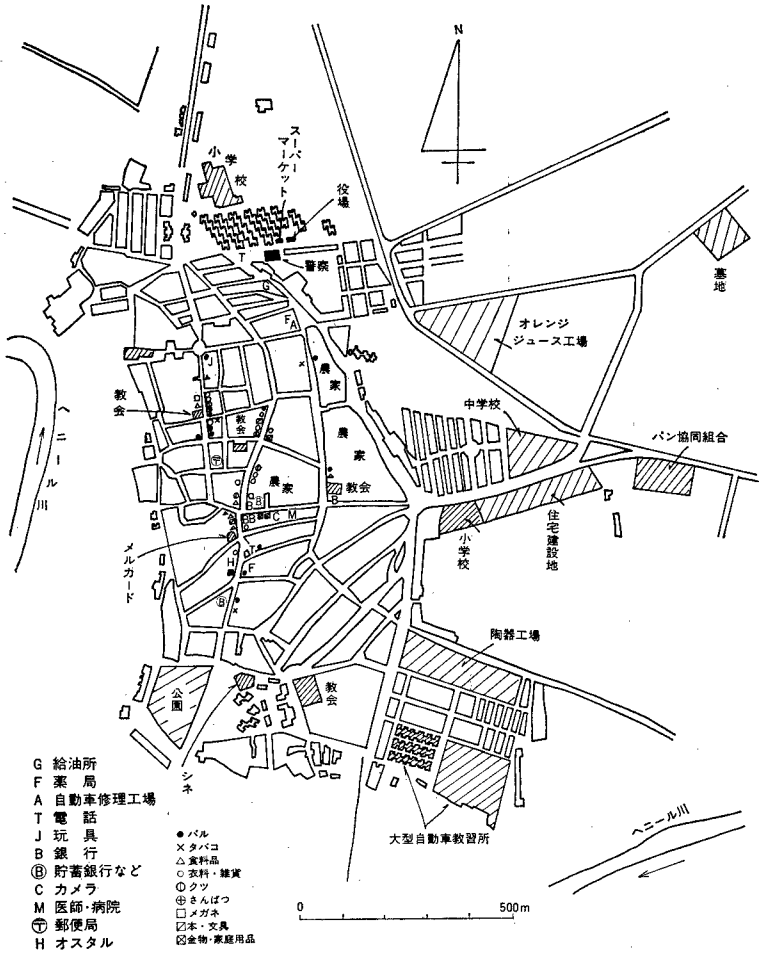
ある。南の広場からは駅までタクシーの便があり、自動車学校前に乗降場がある。南北の広場に面して、特にバル<sup>®</sup>が集まり賑わう。正午まえから午後二時頃までと、夕方六時から九時頃までがピークである。(家庭での昼食は概ね午後二時すぎ、夕食は九時すぎである)。両広場間の街路には食料品・衣料・電気器具など日用雑貨が扱われ銀行も一店ある。前記アンドハルに較べると総じて都市的機能が小規模であり、後背地の人口が五分ノ一であることから、より在郷町としての性格が明瞭にみとれる。

段丘上に位置しているため、川寄りの家屋は、いわゆる吉野式(道路に面した一階が家屋構造では二階、ときには三階)で、家屋内のベランダからの眺望は見事である。図の北端から少し北にグアダルキビルにかかる石橋があり一五〇〇年頃の築造で知られる。また役場横のサン・バルトロメ教会はゴチック様式であるが、バロック様式の塔が混在して遠方からも目立つ。なお、南北広場間の距離は歩測で約二〇〇米である。

### 3、コルドバ Córdoba 県・バルマ・デル・リオ Palma del Río

コルドバとセビリアのほぼ中間、グアダルキビル本流と、支流の中では最も重要なヘニール川の合流点に位置する。海拔五四米、周辺を含め一九九平方軒、人口一・九万人の中心集落である。コルドバを過ぎると、とくにリオ地名の多いことに気付くが、いずれも本流に近く、アンダルシア農業の中心地域を後背地として発展してきた在郷町である。現在なおセビリアは河港であるが、コルドバまで水運のあった回教徒・ローマ時代には、交通上の要衝としての機能も大きかったに違いない。遡ればグラナダに至るリオ・ヘニール

第3図 Palma del Río 市街



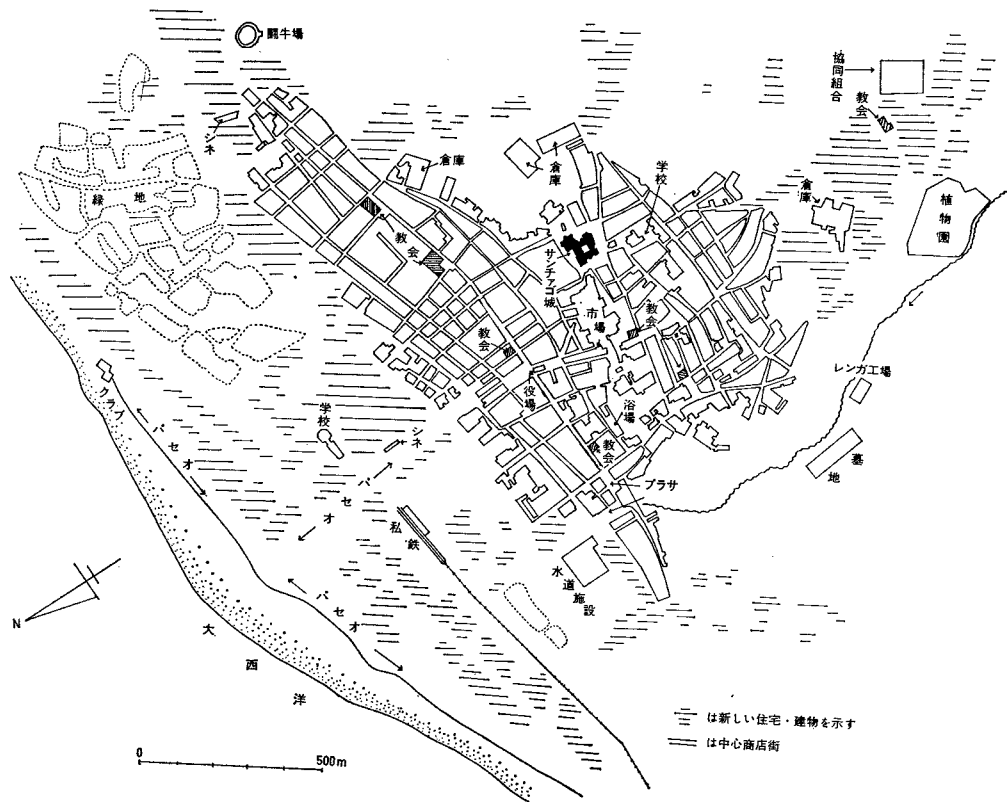
ルト、グアダルキビル本流の合流点にパルマ・デル・リオが栄えたのも故あることである。第四表は主なりオ地名を示すが、共通して豊富な農産物の集散と若干の加工場を特色として持っている。コルドバから下流へ二〇軒のアルモドバル・デル・リオで海拔一二三米、次第に下ってセビリアから下流一〇軒のコリア・デル・リオで五米となる。さらに川口のサンルカール・デ・パラメダまでの七〇軒はイベリア最大の低湿地となっている。位置的には、より下流のアルカラ・デル・リオが上流のピリヤベルデ・デル・リオより海拔八米高くなっているのは、単に集落立地の高度差を示すに過ぎない。

第三図はパルマ・デル・リオ市街である。形態からみて街村の形をとる。西はヘニールの谷になっているため、街の拡りの方向は、北と東南、特に東への変化が大きい。まずメルカードのすぐ北の四ツ角は現在の中心である。広場ではない。外観としては銀行が三店集り商店も軒を連ねる。車も疎らで、その必要もないが、交通警察官の出ている唯一の場所である。この四ツ角から、やや西に曲ってその後はほぼ直線に北へ向う道が最も古いのではないか。途中に小さな円形の広場がある。ただ、商店分布は、これより北に殆んどみられず、この直線路より一つ東側の孤状道路南半に二つの銀行その他があり、南下して先程の四ツ角に至る。さらに、もう一つ東側の孤状道路は商店も少なく、農家の分布も多いから、より新しいと考えられる。先刻、出発したメルカードの看板には一九三〇年の年号が記されている。その他周辺は近年拡大したもので、メルカードを南に下ると、公園を伴って住宅地・シネ・教会等があって、その東は陶器工場・大型自動車教習所などとなる。また、その北の学校付近には、新しい住宅地や、パン協同組合・オレンジジュニス工場が点在し、北端は公営住宅・学校の他、引越した役場・警察署・スーパーマーケットがある。なお、アンダルシアの各都市で見受けられる街路樹には、オレンジが多いが、果樹として栽培していないため実は食べられない。(例えば第二図、ナランハの並木参照)。この街の新しい住宅地域にも至るところナランハの並木があるが、畑のものと全く変らない。当然、つい近年までの畑地を都市化して、並木道に予定される果樹は計画に従い残したものと考えて間違いはない。国鉄駅までは街の南端から三軒近くも離れるため、役場経営のマイクロバスが低料金で街中を巡回しながら連絡している。

#### 4、カジス Cádiz 県・サンルカール・デ・パラメダ Sanlúcar de Barrameda

グアダルキビルの川口に位置し、同名の郡(二七三平方軒、人口五・四万、三自治体)の中核である。市の面積一六五・

第4図 Sanlúcar de Barrameda 市街（市役所資料より筆者補訂）



二九平方軒、人口四万人、海拔三〇米。アンダルシアの歴史は、この川を遡って作られていった。

回教徒からこの地を回復したのは一二六四年、アルフォンソ十世のときである。とくに、一四九八年におけるコロンプスの第三回目探險や、一五一九年のマゼランの世界周航が、この地を出発したことで広く世界に知られるようになった。第四図は現在の市街図である。今までみた在郷の市場町とは趣を異にし、古城サンチアゴがその核となっている。城は崩壊した部分も多く閉鎖され周辺を觀察するにとどめる。ほぼ同じ高さの基盤の上に専門学校が置かれ落着いた環境である。城を下ると一方を市場に面した袋状の広場があり、興味深い形であるが人の集りには利用されていない。公衆浴場の前あたりに、いくらかの露店をみるのみである。屈曲した大小の広場が連なるこの付近は当然古い都市核と考えられるが、それほどの賑わいをみせないのは惜しまれる。

それに引き替え、役場の前の通りは現代的な商店街になっていて、銀行・日用雑貨・食料品・バル・カフェテリア等が連なり都市的景観を呈する。

次に周辺をみると、概ね新しい住宅地に囲まれるが、学校・シネマ・浄化場・墓地・レンガ工場・植物園・協同組合・倉庫・闘牛場などが散見する。海岸に近く、私鉄の駅があるが、カジスに近いプエルト・デ・サンタマリア（三・六万人）に至る。海岸にクラブ・幅広い散歩道があるのは、海水浴場として名高いためである。

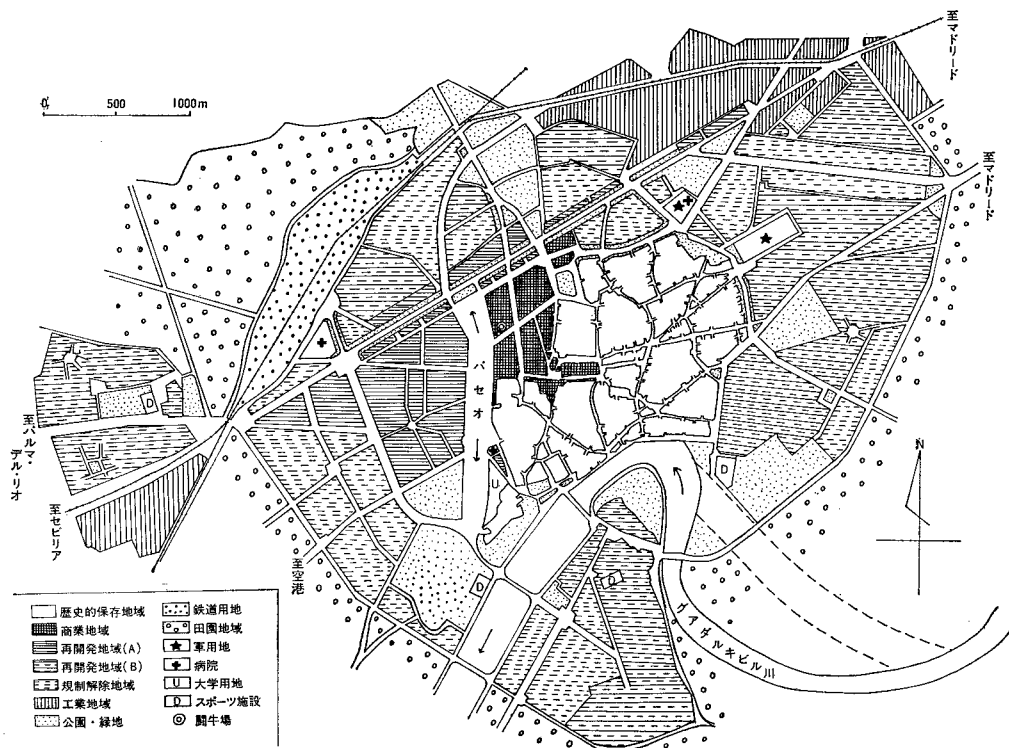
#### 四、古都の都市計画

これまで、アンダルシアの小都市について市街図をもとに、その景観を眺めてきた。次は、わが国に紹介されることの少ないこれらの集落と異なり、広く知られた歴史的都市について、その都市計画と土地利用プランを概観してみたい。

##### 1、コルドバ Córdoba の事例

コルドバ市役所で得た地図の中に、一八五一年の Plano de Córdoba のコピーがある。<sup>②</sup>近代産業の始まる以前の市域の様子が知り得て興味深い。また、同時に入手した第五図と比較してみると、当時の市域は現在の歴史的芸術的保存地域と商業地域の約半分（闘牛場のある一画と、その東側の区画を除いて）がそれにあたる。

第5図 コルドバ市街総合土地利用計画 Excelentísimo Ayuntamiento de Córdoba により筆者補訂





コルドバの白い家並みの続く曲りくねった道は、花に飾られたパティオの風物とともに、この街を代表する観光要素である。市役所の都市計画の主眼は、いかにそれらの景観を修復保存するかに置かれていると云って過言ではない。机にひろげられた作業中の図面は、歴史的建造物の修復に関する製図が殆んどである。

地域住民の生活向上を何に託すかを考えた場合、内陸の立地条件の悪いこの地に高度な工業化を望むのは無理である。また、それによって予想される弊害を思えば、むしろ貴重な歴史的建造物や街並みを含めて環境改善に努め、国内外よりの客を集めるのが得策と思われる。第五図の土地利用計画をみても、その傾向が顕著である。あくまでも、中核となるのは観光対象としての保存地域で、前述のようにその保全・整備につとめる。スペインで市販されているコルドバ市街図や政府発行の案内をみても、記載の地図は旧市街のみである。その周辺は、Huerta, Barrio, Campo など畑・郊外・野原・いなか等をあらわす地名で表記されていて対象外である。

ところで、都市人口の変遷(第五表)をみると、一八五一年の Plano de Córdoba と同時代では人口三・七万人の規模であったものが、一九七〇年には二三・六万人に増加している。それらの増加分は概ね旧市街の一部である前記商業地域と旧市街をとり囲む周辺地域に分布しているわけで、この周辺区の環境整備が旧市街の保存・修復と相俟って、現代的な歴史的観光都市としての機能を備えることになる。

例えば第五図のほぼ中央、闘牛場の西側を、南北に幅広い散歩道・庭園が通じる。これは旧市域の外縁にあたるが、その西方一帯は高層化された高級住宅群やホテル等が建設され整備された現代都市が生まれつつある。(集中再開発地域A)。また旧市街の東側一帯に多くみる再開発B地域も、一般住宅を主とした建設に努力している地区である。第五図は一九五八年作成のものであるが、稿を改めて論ずるマドリードの基本計画が一九六一年に出来ているし、後述のセビリアも概ね六〇年代以降が多いから、コルドバはスペインでも計画の早い都市といえよう。なお同図中で、鉄道用地になっている東側は闘牛場東、コロン広場の北方まで現在コルドバ駅になっている。

## 2、セビリア Sevilla の事例

マドリード、バルセロナ、バレンシアに次ぐスペイン第四位の人口を有し、この状況は一九世紀末以来変わっていない。

第5表 都市の人口変遷

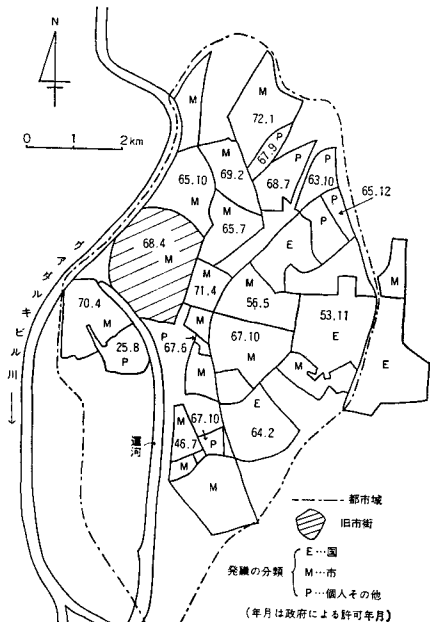
都 市	1857	1887	1920	1950	1970
マドリード	281,170 (1)	477,283 (1)	750,896 (1)	1,618,435 (1)	3,146,071 (1)
バルセロナ	178,625 (2)	272,481 (2)	710,335 (2)	1,280,179 (2)	1,745,142 (2)
セビリヤ	112,139 (3)	143,182 (4)	205,529 (4)	376,627 (4)	548,072 (4)
バレンシア	106,435 (4)	170,763 (3)	251,258 (3)	509,075 (3)	653,690 (3)
マラガ	92,611 (5)	134,016 (5)	150,584 (5)	276,222 (6)	374,452 (7)
カジス	63,513 (6)	62,531 (9)	76,718 (10)	100,249 (18)	135,743 (22)
グラナダ	63,113 (7)	73,006 (8)	103,368 (9)	154,378 (9)	190,429 (13)
コルドバ	36,501 (11)	55,614 (12)	73,710 (13)	165,403 (10)	235,632 (11)
アルメリア	23,018 (16)	36,200 (18)	50,194 (17)	76,497 (20)	114,510 (25)
ハエン	19,738 (20)	25,706 (25)	33,444 (27)	61,610 (28)	78,156 (32)
ビルバオ	17,649 (24)	50,772 (13)	112,819 (8)	229,334 (7)	410,490 (6)
ウエルバ	8,423 (42)	18,195 (34)	34,437 (34)	63,468 (26)	96,689 (28)

(註) ( )内の数字は50県庁所在地中の順位を示す

Emilo Alija Rivarés : Geografía de España により作成

(第五表参照)。平均高度一〇米、<sup>②</sup>グアダルキビル最上流にある河港で流域随一の工業都市であるが前記コルドバやグラナダと共に、アンダルシアを代表する歴史的都市として観光客を招来する。市役所本庁から離れて、スペイン広場近くにある都市計画課も約二〇〇人のスタッフを擁するが、コルドバ同様、保存地区の修復・整備に最も重点を置いている。第六図は同課で得た資料の一部である。<sup>③</sup>図中央左上の斜線部分が旧市街地にあたり、一部の建物(例えば闘牛場・救済病院など)を除いては、一六世紀に完成されていた。すぐ南に接する旧タバコ工場は、オペラ「カルメン」で知られるが、一八世紀のアーバンフリンジにあたる。この地は現在のセビリア大学で、一九世紀末のもので

第6図 セビリヤの開発計画



たと推測するが未調査である。なお許可年月の記されていない地区は計画審議の段階と考える。

いずれにせよ、歴史的建造物に恵まれ、他の西欧諸国とは趣の異なる屈曲した街路と家並みの景観は、それだけでも立派な文化財である。殊にカテドラルの一角、ヒラルダの塔から市街を眺望すると、足下に広がる旧市街の特色ある風物や、遠く旧市をとり囲む高層の住宅群の遠望など、抜けるような青空の下に展開される歴史的都市の姿は圧巻である。

コルドバと同じく、古い市街地を保存・修復しながら、なお現代都市として整備発展しつつある現況を眼前に理解しうるのである。

五、むすびにかえて

以上を要するに、古来いくたの大きい文化的混合を経た故に最もスペインらしさを留めるアンダルシア地方で、その動脈

ある。前記第五表によっても、一九世紀末の人口は一四万人にすぎず、都市域も旧市街と当時の外縁の一部、それに運河を越えたバリオ・デ・トリアナの一面にすぎなかった。また第六図の各区画に示す記号は開発計画の発議主体で、Eは国が、Mは市、Pは民間などとなっている。数字は、その計画が政府によって許可された年月である。旧市街をはじめ、その周辺に拡がる地区は殆んど市の計画・発議になるもので、自治体として当然と思われるが概ね一九六〇年代以降である。国と民間のそれは都市域東方の山手寄りに多くみられるが、民間のものでは運河対岸のバリオ・デ・トリアナ南側に一九二五年八月許可の地区があり、工場施設などの拡張計画であっ

となつたグアダルキビル流域の都市について若干の考察を試みた。主眼は、限られた枚数内の解説よりは、むしろ入手しえた集落図の紹介に置いている。我が国に於けるスペインの地理学研究が他の西欧諸国に較べ極端に少ない故にでもある。

二〇世紀は世界的に科学技術の進展と都市化の時代であった。地理的には、まぎれもなくヨーロッパの一角にあり、かつては世界に先駆けて海外に雄飛したスペインが、永い停滞と政治的混乱によって久しく中進国的な地位に甘んじなければならなかつた。既述のごとく都市の規模からみても、急激に工業化を進めた我が国が百万都市八を含め、人口一〇万以上一八一市（一九七七・三月末）を数えるのと対比しても、その緩慢さは明らかである。

しかしながら、こうした世界的な都市化の傾向は現在に至つて、漸く都市内部の諸問題に再検討すべき時期を迎えている。例えば大阪市が昭和六五年を目標として、「働きやすく、住みよい、楽しいまち」づくりを設定したのもそのためであり、緑化や「歴史の散歩道」整備などに努めるのも、「働きやすいが住みにくい」といわれる現実からの向上を目指すからである。一面、都市化の遅れたスペイン諸都市に、却つて壊されなのままの風物が数多く残されていることに気付く。それは単に景観のみでなく、土地の人々の心根をも含めた地域全体の中に見出される。またスペインの中でも、敢えて後進的地域といえるアンダルシアに著しい。この地域には、グラナダ、コルドバ、セビリアを結んで、いわゆる Triángulo Bético の著名な歴史的遺産があるばかりでなく、訪れる観光客とてない多くの小集落にまで至るところにみる事が出来る。

十年一日の如くというが、我々は土地の人からみて、ありふれた街角や小集落のたたずまいの中に数百年も変らぬと思われる素朴で鄙びた景観に接しうる。これは既に先進工業国の現代都市では失なわれて久しい、或は急速な勢いでなくなりつつある情緒である。しかし、またこのことは訪れる人達に、単なる旅情とは異なる言ひしれない遣る瀬無さを呼び起させる。アンダルシアに漂う物悲しさは、代表的な踊りであるフラメンコの激しく早いリズムと喧噪にも聞える拍手の中にさえ感得しうる。これは人々の心を表現するといわれるが、アンダルシアは、そうした素朴で飾らない、しかも訴える悲しさを持った人々の故郷である。

特有の情緒と「ヨーロッパのアフリカ」とまでいわしめる眩しいばかりの太陽は、国外からも多数の人々を集める。フランス海岸に続くコスタ・ブラバに始まり、コスタ・デル・ソルに至る地中海岸は、沖合のマジョルカ諸島を含めて太陽を求める人達で賑う。スペインは世界一の観光黒字を挙げる国である。

また、現代に生きるこの国が工業先進国の仲間入りを願い、経済発展を進めている中であって、アンダルシアの経済的・社会的地位が国内先進地域に伍するまでには、なお多くの課題を解決して行かねばならない。「住みよく、楽しいまち」に加えて「働きやすい(就職の機会に恵まれた)まち」「つくり方に努めねばなるまい。それにしても、ここ数年で際立って汚れてしまった、泡だらけのグアダルキビルの流れが心にかかってならないのである。

(付記) 昭和五二年度大阪府在外研究員としてスペイン・ポルトガルに出張の機会を与えて下さったことに厚く御礼申し上げます。この小稿は研修の一部であり、昭和五三年度の近畿都市学会(於奈良女子大学)口答発表したものである。

#### 註及び参考文献

- ① Editorial Planeta, S. A.: Gran Enciclopedia Larousse, tomo quinto, p. 436.
- ② 地名の原名表記は、本文が縦書のため煩雑をさけて必要最小限にとどめた。片仮名は文部省「地名の呼び方と書き方」(昭和三三年十二月)に準拠した。
- ③ España Anuario Estadístico 1977: Presidencia del gobierno instituto nacional de estadística.
- ④ Emilio Alija Rivarés: Geografía de España, tomo III. La Riqueza, 1975. p63. と前掲⑥に於て、異なる統計書から作成したたゞ微小な数値の差があるが、そのまゝに記載した。
- ⑤ Observaciones relativas al año climatológico 1976, por estaciones meteorológicas. 前掲によれば、気候区分として次の各地域をあげている。( )内の地名は第二表に示した代表的都市を示す。  
 Noroeste (La Coruña), Cantábrica (Bilbao), Duero (Avila), Central (Madrid), Extremadura (Badajoz), Alto Ebro (Pamplona), Cataluña (Barcelona), Levante (Valencia), Sureste (Murcia), Cuenca del Guadalquivir (Cádiz, Córdoba, Granada, Jaén, Sevilla), Costa Sur (Almería, Huelva, Málaga) Baleares (Palma de Mallorca) 等、Plazas de Soberanía. Canarias は割愛した。グアダルキビル流域は一區画として扱われている。
- ⑥ 前掲③統計書。一九七六年度の最多雨観測地は Vigo (Peinador) の二一九四ミリとなっている。
- ⑦ 前掲③
- ⑧ Emilio Alija Rivarés: Geografía de España, tomo II, El Hombre, 1973. 文献内の統計年度は一九六七年である。
- ⑨ 前掲③。例えばオリーブでは全国生産の七四・八％(ナンエン三四・三％、コルドバ一八・六％、セビリア一一・二％、グラナダ四・

五%、マラガ四・〇%、カジス〇・八%、アルメリア〇・五%である。

⑩ 前掲④。ガリシア一六・五%、アンダルシア一四・四%、カスチーリヤ・ラ・ビエハ九・八%、カスチーリヤ・ラ・ヌエバ八・四%、レオン九・六%、カタルーニャ・バレアレス七・四%、エストレマドーラ八・八%、アストリアス・サンタンデル九・九%等である。

⑪ 前掲④。スペインにおける農地の規模を分類して、零細農地を二ヘクタールまで（①戸数一七二七九四、②全体の一四・八%、③その面積六九二八〇ヘクタール、④全耕地の一・六%）と、五ヘクタールまで（①二六五二三〇、②二二・七、③二〇八七四七、④四・九）に分けている。小土地所有は五十二〇ヘクタールまでとし、（①四八九四八〇、②四二・〇、③一〇五〇〇八五、④二四・八、中程度所有は二〇一〇〇ヘクタールである。（①二〇七〇四一、②一七・七、③一六六八七〇、④三九・三）。大所有は一〇〇十一五〇ヘクタールで（①一一九〇五、②一・〇、③二五八五一八、④六・一）。大荘園は一五〇一〇〇〇ヘクタールの規模で（①一九二二四、②一・六、③八〇八七八四、④一九・一）、特に大規模な大荘園は一〇〇〇ヘクタール以上である。（①一三四一、②〇・一、③一七六〇一〇、④四・一）。また地域別にみると、全国では五ヘクタール以下六・七%、五一一〇が二四・九%、二〇一一〇〇が四〇・一%、一〇〇以上二八・三%に対し、アンダルシア西部の規模が大きく、五ヘクタール以下四・一%、五一一〇が一五・八%、二〇一一〇が二六・九%、一〇〇以上が五三・二%となっている。

⑫ 前掲⑧。国際移動についてみれば、二〇世紀初頭一九〇一一一九一二年では、米州諸国が多く、アルゼンチン五六・五万人、キューバ二四・三万人、ブラジル九・〇万人、メキシコ三・九万人、ウルグワイ一・三万人、ベネズエラ〇・一万人、その他米州諸国三・九万人、計九九万人である。また第二次大戦後の一九五五―一九六三年では、ベネズエラ一六・九万人、アルゼンチン八・〇万人、ブラジル六・七万人、ウルグワイ二・八万人、キューバ〇・五万人、メキシコ〇・三二万人、その他米州諸国二・四万人、計三七・七万人となり、一九六五―一九六八年では、ベネズエラ二・四万人、アルゼンチン一・九万人、ブラジル〇・六万人、ウルグワイ〇・二七万人、メキシコ〇・一三万人、他の米州諸国一・〇万人、キューバなし、計六・四万人となって米州諸国への移動が漸減している。これに対し、現今ではヨーロッパ内への移動が多く、一九六〇―一九六七年ではフランス六・九万人、スイス四・九万人、西ドイツ四・七万人、ベルギー〇・八万人、オランダ〇・八万人、イギリス〇・一万人、その他計一八・六万人で帰国者を差引くと八・四万人が残留となっている。対ヨーロッパの場合、出身県ではアンダルシアの八県は、いずれも五〇県中の上位二〇位内に含まれ、移住・出稼ぎの多い地域性を物語っている。

アンダルシアの農業と移民については、コルドバ県を例として詳細な報告がある。Antonio López Ontiveros (Profesor del Departamento de Geografía de la Universidad de Murcia): Emigración, propiedad y paisaje agrario en la Campaña de Córdoba. 1974.

- ⑬ Ayuntamiento de Madrid, Resumen Estadístico 1975, pp. 86~87. 年間におけるマドリードへの移住を地域別にみると、出入差引で、カスチーリヤ・ラ・ビエハが二二八九人で首位となり、アンダルシア二〇六一人、エストレマドーラ一九六〇人、レオン一二九七人、ガリシア四六〇人、アラゴン二七〇人、ムルシア二三八人、北アフリカ二〇四人、カナリアス一六九人、バスク一六八人、ナバラ二五人、バレアレス一五人、外国人二八七三人等。またカスチーリヤ・ラ・ヌエバへは差引一九五七五人、バレンシア三一四人、カタルーニャ一〇五人などが出超である。
- ⑭ 前掲⑧。一九一〇年頃の文盲率をみると統計のミスではないかと思われるほどの高率である。現在は主として老人にしか見つけられないが、大きい郵便局では代書の係員が準備されている。
- ⑮ 前掲⑧統計書
- ⑯ 前掲①、tomo primero, p474.
- ⑰ 前掲②、tomo séptimo, p456.
- ⑱ バル Bar。和文では酒場だが趣はかなり異なる。居酒屋のような気易い雰囲気や地区住民の憩いの場、社交場でもある。決して猥雑ではなく、制服の警官がちょっと立寄って一杯おると出ていく風景も珍しくない。一般にはブドウ酒だが、ヨーロッパの中でも殊に高温乾燥であるため、ビールもよく出る。大都市では、バルとは別にセルベセリア(ピヤホール)が機能分化していることが多い。買物婦りの子供、これの主婦もよく見かける。
- ⑲ 前掲①、tomo octavo, p65.
- ⑳ 前掲①、tomo noveno, p472.
- ㉑ Excelentísimo Ayuntamiento de Sanlúcar de Barrameda の資料による。図中の——線で囲った地域は、いわゆる古い都市域 Antigua Ciudad を示すが、市役所での聞きとりによるものである。街路形態や現地の観察からみて、サンチアゴ城や市場周辺の最も古くと考えられる地域と同時代に建設されたとは思われない。現市域の中での古い市街地と解する方が妥当である。
- ㉒ Excelentísimo Ayuntamiento de Córdoba 所蔵。Plano de Córdoba 1851。この図中の方位に疑問点があるが、ここでは省略し指す。ゆびさし。
- ㉓ Excelentísimo Ayuntamiento de Córdoba : Plan General de Ordenación de la Ciudad de Córdoba, 1958.
- ㉔ Publicaciones del Ministerio de Información y Turismo, 47, 各主要観光地案内を引用している。
- ㉕ 前掲② tomo II, p.p. 114~125

②⑥ Paseo de la Victoria と Avenida General primo de Rivera でコルドバ駅前から南北に通じる現地域の代表的道路である。スペインの場合、大都市の外縁に幅広い現代的道路が設けられているが、首都マドリドのアトーチャ駅から北へ、シバーレス広場・コロン広場を経てカスチーリヤ広場へ向う南北のメインストリートが一九世紀半ば頃までの市域外縁にあたることと同様である。いずれも賢明な都市計画であったといえよう。

コルドバの土地利用計画については、コルドバ市都市計画課のホセ・レボロ・ディセンタ氏 Sr. D. Jose Rebollo Dicenta : Municipal de Urbanismo Córdoba. の御教示によらる。

②⑦ 前掲 ① tomo noveno, p676

②⑧ Ayuntamiento de Sevilla, Sección de Urbanismo : Plan General de Ordenación.

②⑨ 前掲 ②、六七八頁

③⑩ 拙稿。「大阪都市圏における住文化の地域構造」、『都市と文化』日本都市学会編所収、一九七八年。

③⑪ 前掲 ③及び前掲 ④、六六四頁

一九七六年では二七三九万人の外国人が入国。六二・四％が自動車。二六・七％が航空機。五・九％が鉄道。四・九％が港からである。国別では、フランス(三四・六％)、ポルトガル(一八・〇％)、西ドイツ(一四・二％)、イギリス(一〇・九％)、ベネルクス(七・二％)、スカンジナビア諸国(四・三％)、アメリカ・カナダ(三・四％)、中・南米諸国(一・三％)等が主である。

また一九七〇年の場合、スペイン五〇県中の上位二〇県を記す。①Balears (13.7%), ②Madrid (12.3%), ③Barcelona (8.4%), ④Málaga (5.6%), ⑤Gerona (5.2%), ⑥Alicante (3.9%), ⑦Sevilla (2.9%), ⑧Las Palmas (2.9%), ⑨Zaragoza (2.9%), ⑩Santa Cruz de Tenerife (2.8%), ⑪Valencia (2.4%), ⑫Granada (2.4%), ⑬Cádiz (2.1%), ⑭Guipúzcoa (2.0%), ⑮Tarragona (1.7%), ⑯Córdoba (1.6%), ⑰Lérida (1.5%), ⑱Santander (1.3%), ⑲Pontevedra (1.0%), ⑳Castellón (1.0%) となる。

③⑫ 観光白書、昭和五三年版、総理府編。

一九七六年の場合、収入では、アメリカ、フランス、西ドイツ、オーストリアに続いてスペインは第五位(三〇・八億ドル)であるが、収支は二六・八億ドルの黒字となり第一位である。次いでイタリア(一八・二億ドル)、オーストリア(一七・三億ドル)、イギリス(一〇・九億ドル)等となる。